「今後も支援継続を」

ネパールで医療活動 山本教授（長崎大）帰国会見

ネパール大地震の被災地での医療支援から帰国した長崎大熱帯医学研究所の山本太郎教授(51)が12日、同大で記者会見し、現地での活動報告をした。現地のネパール人医師らが働きやすいよう主に後方支援に力を入れたことを説明し、「これからも切れ目のない復興支援をしていくことが重要だ」と強調した。

山本教授は国際医療NGO「AMDA（アムダ）」（岡山市）の派遣チームの一員として1～4日、カトマンズ北東の山間部にある屋外テントの医療所で活動した。被災による骨折や切り傷などのけが人が多い中、産気づいて出産した女性もいたという。「現地の人が最大限に力を発揮できるように」と、医療所内の動線を確保できるようベッドの配置を考えたり、水の消毒や廃棄物の処理など衛生面での教育に取り組んだという。

今後については、「ネパールが何を必要としているかを見極めた上で、支援を続けていくべきだ」と語った。

【大平明日香】

ネパールでの医療支援について報告する山本教授

ネパール大地震で活動の県立大研究員

「家全壊 テントが必要」

総社市訪ね支援訴え

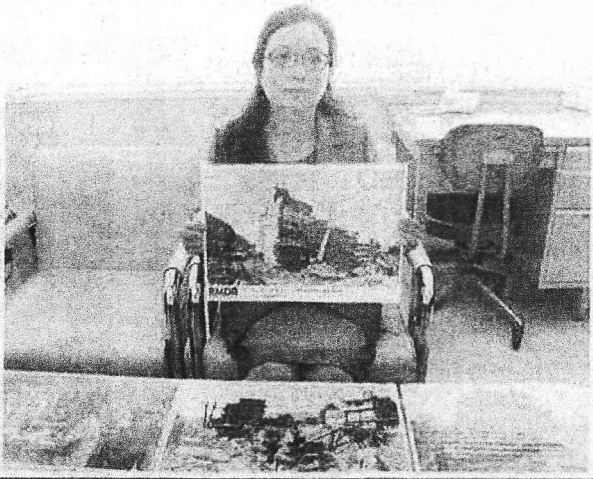
ネパール大地震の被災者支援に携わった県立大（総社市窪木）の外国人客員研究員シュレスタ・ジョシ・アルチャナさん（40）＝ネパール出身＝が19日、総社市役所を訪れ、被災地への支援を訴えた。

シュレスタ・ジョシさんは、国際医療ボランティアAMDA（岡山市）の調整員として1日から約2週間、現地で活動。AMDAの医師の通訳を務めたり、被災状況を岡山市の本部事務所に報告したりした。

総社市役所でシュレスタ・ジョシさんは、現地を撮影した写真パネルを片岡聡一市長に示し、「家が全壊して助けを求める被災者にどう言葉を掛けたらいいか分からなかった」と報告。雨期を迎える被災地では、家を失った人々の寝る場所を確保するためテントが必要となっている状況を説明した。

シュレスタ・ジョシさんは「災害に日ごろから備える大切さを実感した。ネパールに手を差し伸べてほしい」と呼び掛けている。

市は、市役所玄関や公民館など21カ所に募金箱を設けている。（民直弘）



写真パネルを手にネパールへの支援を呼び掛けるシュレスタ・ジョシさん